

先人に思いを馳せて

- ・日本初の温水路
- ・受け継がれる伝統文化



旧、長岡温水路
(日本で最初の温水路)

温水路建設の経緯

- ・大正時代後期当地域に水力発電の計画が持ち上がる
- ・導水路の殆どが隧道方式のため水温の低下が懸念
- ・電力会社との交渉により各集落に補償金が支払われる
- ・その補償金を元に温水路が建設される

- ・長岡集落の役員が先駆けて考案
 - ・水路に段差を作ってゆっくりと水を流す
 - ・水路の中を広くし太陽熱を有効利用し水温を上昇
 - ・落差を利用して暖かい空気と攪拌する

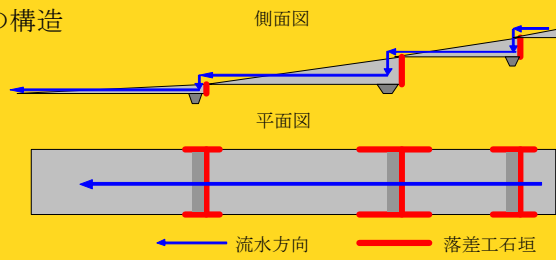
- ・その効果が立証され昭和35年までに5本(総延長約6Km)の温水路群を構築、鳥海の冷水に悠然と立ちほだかり、近代農業の偉大なる礎となっている

大正時代後半当地域に水力発電の計画が持ち上がります。第一次世界大戦の影響を受け輸入が途絶え、工場においての動力が石炭を原料にした水蒸気から電力への転換が進み、その導水路の殆どが隧道方式のため、水温の上昇が抑えられるどころか、益々水温が低下する懸念がありました。

電力会社との交渉によって各集落に補償金が支払われることになり、その補償金を元に稲作の増収を図るべく冷水害の悩みを解決しようとする機運が高まってきました。

各集落で検討する中、長岡集落の役員が先駆けて、太陽熱を有効利用して水温を上昇させるために、水路の中を広くし、水路に段差を作ってゆっくりと水を流し、その落差を利用して暖かい空気と攪拌することにより水温の上昇が期待でき、稲作の増収に結びつくと考え、昭和2年日本初の温水路が誕生しました。その効果が立証され昭和35年までに5本(総延長約6km)の温水路群を構築、鳥海の冷水に悠然と立ちほだかり、近代農業の偉大なる礎となっています。

温水路の構造



各温水路の概要

温水路名	支配面積 (ha)	延長 (m)	通水量 (m ³ /sec)	幅員 (m)	落差工数 (箇所)	施工年度 (改修等含む)
長岡温水路	190.1	919	0.49	10.0	30	昭和 2・28年
大森温水路	121.6	1,410	0.53	10.0	40	昭和 4・28・35年
水岡温水路	13.0	1,045	0.29	6.0~8.6	37	昭和 12・31年
小滝温水路	251.1	1,927	1.25	12.4~20.0	73	昭和 18・26・32年
象潟温水路	239.6	980	0.98	10.0	35	昭和 25年
計	815.4	6,281	3.54		215	



温水路落差部分の石積み工事

温水路工事に携わった人々



温水路の配置図



今後の維持管理等

当該温水路に流入する水は、鳥海山の雪解け水を水源にして山懐を延々と流れて来ます。温水路は、水深を浅くして流速を遅くする構造の為、流れてくる木の葉などが沈殿し易く、その沈殿物に葦等の草が生え、温水効果を低減させる要因になっている。その為頻りに浚渫などをしなければならず、また、経年劣化で落差工の石垣に破損等がみられ、その修復も含め永久的に続くだろう管理に苦慮している。

施設改良の声も上がるが、築50年以上を経て自然に同化したこの施設を、近代的な三面張りの水路にするには忍びなく、頭を痛めている。

😊 鳥海山の恵み

鳥海山の中腹、雪どけ水は冷たい。頂が目の前に見えるところにその源があります。

農家の方々が年に一度その源流に行き、水神様をお参りし農業用水や生活用水が潤沢に流れるように、流れの中の石をよせたり、木の枝を掃ったりの作業をします。



この温水路群は、2003年には土木学会が、日本国内の歴史的土木建造物について、保存に資することを目的として「選奨土木遺産」に認定され、

2005年には農林水産省が、日本の農業を支えてきた代表的な用水を選定して、用水によりもたらされる“水・土・里”（みどり）を次世代に伝え、維持する活動の一環として、秋田県ではこの上郷温水路群と田沢疎水が、「疎水百選」に選ばれております。

また、2009年には、秋田県の有形文化財（建造物）に指定されております。

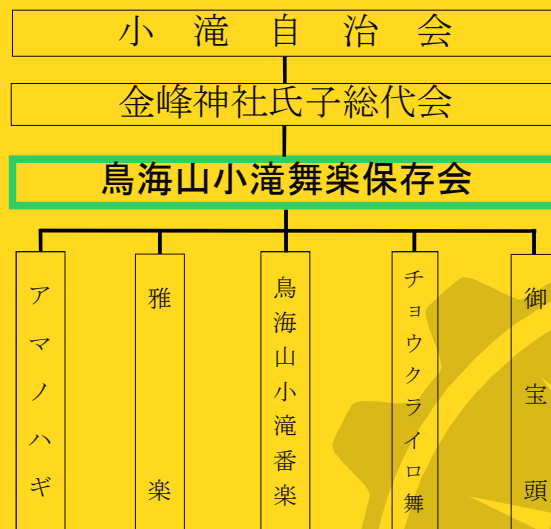
このように現在各方面から注目を集めている温水路、先人が未来の上郷地区に残した偉大なる遺産を、豊かな「ふるさと」造りのために、今後もっともっと有効に活用していきたいものです。

受け継がれる伝統文化



にかほ市象潟町小滝に古来より受け継がれてきた伝統行事、それを支え農村集落の絆として大切に守られてきた民俗芸能の伝承を通じ、若者の諸行事参加を助長し、集落に活力をもたらす。

鳥海山小滝舞楽保存会組織図



例大祭：御宝頭（十二段の舞）



例大祭：チョウクライロ舞（小児の舞）



鳥海山小滝番楽（松迎え）



アマノハギ（小正月行事）



金峰神社の祭礼時に執り行われる「舞楽」は、この地が鳥海修験の里であったことの唯一の証として、また村人の娯楽として大切に受け継がれてきました。

戦時中には、伝承者達が戦地に駆り出され、中断したこともありました。

この芸能だけは存続しなければとの一心で、戦場という過酷な所で戦友たちに披露しながら稽古を重ね、たった一人帰還した方がおられました。

死に物狂いでこの文化を残してくれた諸先輩方の意を無にすることなく、継承していかなければと考えています。

少子高齢化というとてつもない大きな障害が、もう目の前にあります。

しかし、血のにじむ長い歴史と、諸先輩方の熱い心の染み込んだ伝統の襷を、ここで途絶えさせる訳にはいきません。

この伝統文化の継承は、ゴールの無い駅伝競走なのです。

継承に当たっては、小滝自治会のご理解で

- ・自治会費の中に保存伝承に関する予算付け
- ・自治会館を練習会場

課題：後継者不足

- ・少子高齢化（人口の減少：過疎化）
- ・農村集落ではなくなった（住民の職業形態や就業時間が多岐）

幸いにして現在のところ若い世代の加入も多く、順調に継承されているが、その危機感はヒシヒシと感じている。

それでも、保存会独自では若い世代の後継者に加入してもらうことは難しく、地域の防災を担当してくれている消防団員の中から、その団結力を頼みに入会してもらっているのが現状

日々の伝承活動の中で、世代を超えた人間関係を育み、自治会共同活動の運営に力強い存在になっており、その若者達が近い将来、自治会を主宰する大きな力になることを期待している。

お盆前の8月11日岩手の第二回「三陸海の盆」に参加する機会を得、御宝頭・番楽を奉納してまいりました。被災しながらも、いち早く伝統芸能を復活した地元の方々との交流会もありました。



大切な人を失い、心の原点であり誇りであった「ふるさと」を踏みつぶされ、自身が生きてきた証をも失った。全てを失った喪失感、絶望の淵に立たされながら、いち早く立ちあがったのが「伝統芸能」の復活だったと言います。失意のどん底で、再興の声を上げて良いものか？しかし、誰も反対する人はいなかったと言います。

その土地に根強く息づいてきた文化、それはその地に生まれた人々の身体の内奥に染み付いた大地の鼓動でもあります。その大地を揺さぶる伝統芸能の躍動こそが、生かされた者と亡くなった人とを繋ぐ唯一の絆ではないだろうか？

自分達が今携わっている「無形の文化」、形の無い文化と書きますが、被災した人々の心と心とを繋ぐ「太いしっかりとした絆」と言う形が見えた気がします。その絆があるから、被災しながらも元気に明るく今を生きて行ける。

その姿を目の当たりにして、伝統文化の果たす役割がどんなに重要なものかをあらためて感じました。